

葬られたる秘密

むかし丹波の國に稻村屋源助といふ金持ちの商人が住んで居た。此人にお園といふ一人の娘があつた。お園は非常に伶俐で、また美人であつたので、源助は田舎の先生の教育だけで育てる事を遺憾に思ひ、信用のある従者をつけて娘を京都にやり、都の婦人達の受ける上品な藝事を修業させるやうにした。かうして教育を受けて後、お園は父の一族の知人——ながらや云とふ商人に嫁^{かたづ}けられ、殆んど四年の間その男と楽しく暮した。二人の仲には一人の子——男の子があつた。然るにお園は結婚後四年目に病氣になり死んでしまつた。

その葬式のあつた晩にお園の小さい息子は、お母さんが歸つて来て、二階のお部屋に居たよと云つた。お園は子供を見て微笑んだが、口を利きはしなかつた。それで子供は恐はなくなつて逃げて来たと云ふのであつた。其處で、一家の内の誰れ彼れが、お園のであつた二階の部屋に行つて見ると、驚いたことには、その部屋にある位牌の前に點^{ちり}された小さい燈明の光りで、死んだ母なる人の姿が見えたのである。お園は箆^{へら}箆^{へら}則ち抽斗になつて居る箱の前に立つて居るらしく、其箆^{へら}箆^{へら}にはまだお園の飾り道具や衣類が入つて居たのである。お園の頭と肩とは極く瞭然^{はつきり}見えたが、腰から下は姿がだんだん薄くなつて見えなくなつて居る——恰もそれが本人の、はつきりしない

反影のやうに、又、水面に於ける影の如く透き通つて居た。

それで人々は、恐れを抱き部屋を出てしまひ、下で一同集つて相談をした處、お園の夫の母の云ふには『女といふものは、自分の小間物が好きなものだが、お園も自分のものに執著して居た。多分、それを見に戻つたのであらう。死人でそんな事をするものは随分あります——その品物が檀寺にやらずに居ると。お園の著物や帶もお寺へ納めれば、多分魂も安心するであらう』

で、出来る限り早く、この事を果すといふ事に極められ、翌朝、抽斗を空にし、お園の飾り道具や衣裳はみな寺に運ばれた。しかしお園はつぎの夜も歸つて来て、前の通り簞笥を見て居た。それからそのつぎの晩も、つぎのつぎの晩も、毎晩歸つて来た——爲めにこの家は恐怖の家となつた。

お園の夫の母はそこで檀寺に行き、住職に事の一伍一什を話し、幽霊の件について相談を求めた。その寺は禪寺であつて、住職は學識のある老人で、大玄和尚として知られて居た人であつた。和尚の言ふに『それはその簞笥の内か、又はその近くに、何か女の氣にかかるものがあるに相違ない』老婦人は答へた——『それでも私共は抽斗を空にいたしましたので、簞笥にはもう何も御座いませぬのです』——大玄和尚は言つた『宜しい、では、今夜拙僧が御宅へ上り、その部屋で番をいたし、どうしたらいいか考へて見るで御座らう。どうか、拙僧が呼ばる時の外は、誰れも番を致して居る部屋に、入らぬやう命じて置いて戴き度い』

日没後、大玄和尚はその家へ行くと、部屋は自分のために用意が出来て居た。和尚は御經を讀みながら、其處にただ獨り坐つて居た。が、子の刻過ぎまでは、何も顯れては來なかつた。しかし、その刻限が過ぎると、お園の姿が不意に簞笥の前に、何時となく輪廓を顯した。その顔は何か氣になると云つた様子で、兩眼をじつと簞笥に据ゑて居た。

和尚はかかる場合に誦するやうに定められてある經文を口にして、さてその姿に向つて、お園の戒名を呼んで話しかけた『拙僧は貴女のお助けをするために、此處に來たもので御座る。定めしその簞笥の中には、貴女の心配になるのも無理のない何かがあるのであらう。貴女のために私がそれを探し出して差し上げようか』影は少し頭を動かして、承諾したらしい様子をした。そこで和尚は起ち上り、一番上の抽斗を開けて見た。が、それは空であつた。つづいて和尚は、第二、第三、第四の抽斗を開けた——抽斗の背後や下を氣をつけて探した——箱の内部を氣をつけて調べて見た。が何も無い。しかしお園の姿は前と同じやうに、氣にかかると云つたやうにぢつと見つめて居た。『どうして貰ひたいと云ふのかしら?』と和尚は考へた。が、突然かういふ事に氣がついた。抽斗の中を張つてある紙の下に何か隠してあるのかも知れない。と、其處で一番目の抽斗の貼り紙をはがしたが——何も無い! 第二、第三の抽斗の貼り紙をはがしたが——それでもまだ何も無い。然るに一番下の抽斗の貼り紙の下に何か見つかつた——一通の手紙である。『貴女の心を惱まして居たものはこれかな?』と和尚は訊ねた。女の影は和尚の方に向つた——その

力のない凝視は手紙の上に据ゑられて居た。『拙僧がそれを焼き棄てて進ぜようか?』と和尚は訊ねた。お園の姿は和尚の前に頭を下げた。『今朝すぐに寺で焼き棄て、私の外、誰れにもそれを讀ませまい』と和尚は約束した。姿は微笑して消えてしまつた。

和尚が梯子段を降りて來た時、夜は明けかけて居り、一家の人々は心配して下で待つて居た。『御心配なさるな、もう二度と影は顯れぬから』と和尚は一同に向つて云つた。果してお園の姿は遂に顯れなかつた。

手紙は焼き棄てられた。それはお園が京都で修業して居た時に貰つた艶書であつた。しかしその内に書いてあつた事を知つて居るものは和尚ばかりであつて、祕密は和尚と共に葬られてしまつた。

(戸川明三譯)

A Dead Secret. (Kvaidan.)